

第二言語としての日本語の連語習得について

浙江財経大学 方 小 贇

要旨：中国の日本語教育現場では語彙の学習を指導する際、語を個別的・孤立的に捉える傾向があり、教師や学習者の関心が教科書に現れた個々の新出単語に向けられている。このような学習法は語彙の習得や産出にあまり効率がなない。一方、近年では連語と呼ばれる共起する語についての指導が学習効果の向上につながると考えられている。そのため、本稿ではアンケート調査を通して、「同形同義語」「格助詞」「多義語」という三つの面から、中国人日本語学習者によく見られる連語習得上の問題点を考察し、中国人日本語学習者の語彙や連語の習得に寄与できると考える。

1. はじめに

第二言語習得研究において、Nation (2001) は言語学習のゴールは言語構成要素、概念、技能、テキスト・談話の四つに関する知識の習得であり、言語構成要素の一部である語彙の習得は、言語学習のサブゴールの一つであると主張している。このように、語彙知識やその習得は第二言語の場合も母国語と同様、理解および産出の両面において極めて重要な役割を担っていると云える。

ただし、日本語教育の現場では語彙習得は従来単語の意味理解を中心としてきており、単語一語一語を覚えることは学習者に任されてきた。このような習得方法は語彙の記憶や産出においてあまり効率的であるとは言えない。近年、英語教育では、語を適切に使用できるようにするには、連語と呼ばれる共起する語についての指導が重要視されてきており、

その有効性も証明されつつある。一方、日本語教育では連語は学習指導要領において、具体的な指定に至っていない。その原因の一つとして、連語というものの定義が明確にされていないということが考えられる。

以上を受けて、本稿は連語の定義および諸先行研究を踏まえつつ、調査結果から中国人日本語学習者によく見られる連語習得上の問題点及びその指導法を考察し、中国人日本語学習者の語彙や連語の習得に寄与することを研究の目的とする。

2. 連語の定義及び先行研究

日本語の「連語」という概念及びその範囲については、諸学者によって多岐にわたっているが、ここで宮地 (1985)、国広 (1985、1997)、姫野 (2006) などの先行研究を取り上げて考察する。

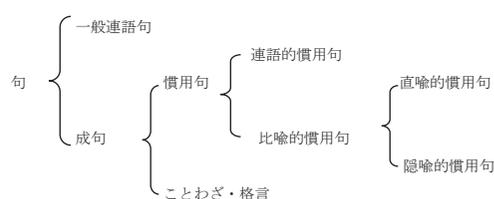


図1 宮地 (1985) による句の分類

宮地 (1985) は、日本語の句を上記の図1のように、「一般連語句」「慣用句」「ことわざ・格言」などに分類している。そのうちの「一般連語句」とは、「雲が流れる」「空が青い」など二語 (以上) が意味関係の許す限り自由に結合してできるものである。それに対し、「連語的慣用句」とは、「汗をかく」「うそをつく」などその結合に制約があり慣用が固定的であるもの

をさすが、「道草を食う」「口が軽い」などの「比喩的慣用句」ほどには全体として派生的な意味を持たないとしている。つまり、宮地（1985）は「意味関係の許す限り自由に結合してできる語句」を「連語句」として認めている。

国広（1985、1997）は、二つ以上の語の連鎖は、連結の固定度と意味の固定度によって三つの段階があるとしている。「熱い風呂」「風呂を沸かす」のように自由に作ることのできる語の結び付きを「自由結合」、「風呂から上がる」のように語と語の結び付き方は決まっているが全体の意味は個々の語の意味からすぐ分かる結び付きを「連語」、「骨を折る」「足を洗う」など個々の意味からは全体の意味が出てこない語の結び付きを「成句」や「慣用句」と分類している。つまり、国広（1985、1997）は「連語」を「自由結合」でもなく、「成句」や「慣用句」とも異なった「語と語の結び付き方は決まっているが全体の意味は個々の語の意味からすぐ分かる結び付き」であると認定している。なお、連語は従来の辞典では記述の対象にされなかったが、言語使用者が勝手に作ることができない定型表現であるため、外国人学習者のためには、記述されるのが理想であると国広（1997）は述べている。

このように、「連語」がある程度結合が固定し、「自由結合」と句の構成要素の意味を反映しない「慣用句」とは区別されているのは伝統的な捉え方である。実際、日本語教育において、慣用句と連語は慣用的な結び付きであり、学習者にとって予測が難しいため、重要視されている。一方、自由結合は語レベルの知識に頼りすぎて文脈の中での意味を確認したり、使用されている共起語に注意があまり向けられなかったりする傾向が見られる。しかし、近年日本語教育では、連語を幅広く捉える必要があると指摘されている。姫野（2006）は、「固定している語同士の結び付き」の連語は、外国人学

習者にとって重要なものであるが、連語として扱われない普通の句においても、語の連結関係を示す必要があると指摘している。「薬を飲む」のような自由結合に分類可能な結び付きは、学習者の母語の影響によって「*薬を食べる」のような誤用が出てきたため、言語背景の異なる外国人学習者に対しては、できるだけ広い範囲の結合関係を示しておくことが望ましいと述べている。また、大曾（2005）は「風呂を沸かす」のような母語話者にとって常識的な表現の中に、学習者にとっては慣用的な表現もあると指摘している。

本稿は以上のような指摘を踏まえ、日本語教育の立場から大曾（2005）や姫野（2006）と同様に、自由結合も連語の一部として扱うことにする。

3. 連語の習得に関する調査

連語の習得の実態を明らかにするため、2015年12月に所属機関である浙江财经大学3年に在籍する中・上級レベルの日本語学習者40名を対象にアンケート調査を行った（調査紙は論文末尾に添付している）。アンケートは二部構成とし、次の内容になっている。

第一部：単語の予習・復習に関する選択肢問題である。

第二部：文の中で連語の意味を確認し、それを中国語に訳してもらおう。

結果として、第一部の質問項目から、学習者は単語を予習する際、「辞書で単語を調べる（35名、87.5%）」「単語を繰り返して書く（30名、75%）」が多かった。また、復習に関しては、「単語の意味を覚える（32名、80%）」「単語を繰り返して書く（29名、72.5%）」との回答が多かった。この調査から、学習者が個々の単語に注目し、繰り返して覚えていることが分かった。日本語の語彙学習が進み、単語数が増える

ことになると、語を個別的に覚えるような学習方法はあまり効率的であるとは言えない。覚えても、すぐ忘れてしまう、あるいは正しく使えない場合も多くあると考えられる。これは第二部の調査で明らかになった。

第二部の問題は文を提示して「気が気でない」「足がある」「目が覚める」「机上の空論」「食指が動く」という五つの連語を、それぞれ「習ったことがあるかどうか、意味を知っているかどうか」を確認したうえ、その中国語訳も書いてもらった。分析結果として、以下のような傾向が見られる。

(1) 示した用例では、文字どおりの意味で使われる連語（「外の騒がしい音で目が覚めた」）のほうが理解しやすかった。この場合、学生全員が正答できた。

(2) 日本語能力試験1級にも出ている「気が気でない」に関して、「習ったことがある（95%）」「知っている（87.5%）」と答えた学生がかなり高い比率を占めているが、中国語に訳してもらうと、正答率は37.5%しかない。多くの学生は「気にする」「気にしない」と誤解してしまった。つまり、この連語を学習したにもかかわらず、正しく理解できないのである。

(3) 「この町は夜遅くまで足があるので、便利でいい。」という文から、正しく答えた学生数は10名、全体の25%を占める。「人影がいる」「にぎやかだ」「歩いていける」のような答えが多かった。それは全体の文脈からの推測や「足がある」に対する連想からきたものと考えられる。

(4) 「机上の空論」は中国語でも類似した表現がある（紙上談兵：紙の上で兵法を談ずる）ので、正答率がかなり高く、87.5%であった。

(5) 「ここまで株価が下がると、逆に食指が動く。」という文から「食指が動く」について、正答率は意外に低く、30%であった。この連語は食欲が起こることから転じて、ある物事に対

し欲望や興味が生じるという意味になる。中国語でも「食指大動（食欲が起こる）」という言葉があるため、学生がそれをそのまま当てはめ、「食欲が起こる」「欲張る」という答えが出てきた。

以上第一部と第二部の調査から、学習者が連語を習得する際、語の結び付きからではなく、単語を孤立的に覚える傾向が見られる。このように学習効率があまりいいとは言えないため、よりよい学習方法や指導法が求められる。本稿では先行研究を踏まえ、連語指導法が学習効果の向上につながると考える。また、五つの連語に関して意味確認を行い、母語中国語の影響が非常に大きいことが分かった。この調査結果を受けて、次の4節では連語習得に関する諸問題点を詳しく考察する。

4. 連語の習得に関わる問題点

中国語を第一言語とする日本語学習者（以下、中国人日本語学習者）にとって、ほかの言語を第一言語とする日本語学習者と同様、習慣的にまとまって使われる連語を習得するのに難しいと思われる。また、日本語学習者の作文や談話には、「*薬を食べる」「*ビタミンを食べる」のような、誤用や不自然な連語がよくある。そして連語の観点から、学習者がどのような連語の誤用や不自然な表現を生じるかを考察すれば、今後の指導を示唆できるとと思われる。

市川（2001）は誤用の要因に、母語干渉による誤りと母語干渉以外の誤りがあると述べている。母語干渉以外の誤りは、(1) 言語内の誤り：目標言語の構造そのものが困難であったり、既習の言語規則を未知の構造に適用しようとした際の誤り、(2) 発達上の誤り、(3) 誘発された誤り、(4) 伝達方略に基づく誤り、(5) 学習方略による誤り、などが挙げられる。中国人日本語学習者は漢字や母語である中国語の影響が強く感じられ、日本語の連語を習得する際、中

国人学習者特有の問題点が存在していると考えられる。以下、市川（2001）の提示した誤用要因をもとに、「同形同義語」「格助詞」「多義語」などの視点から諸問題点を詳しく考察する。

4.1 同形同義語¹に見られる誤用

小森（2013）は先行研究などを踏まえ、漢語が日本語の語彙全体に占める比率が高いということに加えて、その漢語の約4分の3が中国語でも用いられている日中同形語であり、さらにその同形語の3分の2が日本語と中国語の両言語で意味が同じ同形同義語に分類される語であると指摘している。すなわち、両言語において同形同義語が高い割合を占めている。そのため、中国人日本語学習者は、漢字の形と意味について母語の知識がある程度転用でき、非漢字圏学習者より日本語の習得に有利だと捉えられがちである。しかし、実際、両言語において同形同義語は辞書的な意味が一致するにもかかわらず、用法や共起制限においては、必ずしも一致しないため、中国語で成立する共起関係が日本語では成立しない場合もある。共起語によっては、日本語は和語が適切なこともある。そのため、中国語の共起関係をそのまま日本語に転用すると、誤用となる可能性がある。たとえば、日本語の「破壊」と中国語の「破壊」は、辞書の意味記述では、「こわすこと、こわれること」という共通の語義を有する。しかし、中国語の「破壊」では、「破壊公司的規定（直訳：会社の規定を破壊した）」と言えるが、日本語の「破壊」では「*会社の規定を破壊した」とはいえない。日本語では、「会社の規定を破壊した」と、和語を用いるのが適切であろう。ほかにも、「体現愛国精神→愛国精神を表す（*愛国精神を体現する）」「整理頭髪→髪のを整

える（*髪のを整理する）」などの例が挙げられる。このように、共起や用法の点から見ると、同形同義語も中国語とずれがあることもある。

同様に松本・堀場（2007）も、日本語の語彙習得について中国人日本語学習者の共起語の知識は遅れており、漢語に比べて和語の習得が遅れていることを指摘している。つまり、中国人学習者にとって和語の習得が漢語より困難であるため、産出の際に共起語の知識が必要とされる和語動詞を重視すべきだと言える。また、学習を指導する際、漢語に対応する和語についても、明示的な学習が必要だと考える。

4.2 格助詞による誤用

格助詞の選択に注意を払う代わりに、一つのかたまりとして認識された連語は、効果的に記憶されるという見方はあるが、こうして助詞をばらばらに学習していく方法では、学習者が助詞の全体像がつかめないため、誤用を生み出す場合もある。例えば、母語の影響で中国人学習者の作文や会話から「わたし あなたのこと好きです」のような格助詞「不使用」などの表現がしばしば現れる。また、「*幸せな生活を憧れている」「*人目に恐れる」のような誤った表現もよく見られる。

したがって、本稿では日本語の連語を学習するうえで、助詞から乖離できないと考える。むしろ、「格」という文法システムを備えない中国人日本語学習者に、日本語の格システム（Nが、Nを、Nに、Nへ……）を提示し、「連語」という概念をもあわせて導入することが学習を促進できると考える。たとえば、「田舎」と「出る」の組み合わせを見よう。

1 同形同義語は意味の面では、日本語と中国語とで辞書で意味記述が一致するものという。（文化庁『中国語と対応する漢語』より）

表1 「田舎」と「出る」の組み合わせ

日本語	間違った中国語訳	適切な中国語訳
田舎を出る	出 村莊	離開 村莊
田舎に／へ 出る	出 村莊	到 村莊
田舎から 出る	出 村莊	從 村莊 来(的)
田舎まで 出る	出 村莊	走到 村莊

上記の表1から分かるように、中国語のような格助詞を持たない言語を母語とする学習者にとって、「田舎」と「出る」の組み合わせは格助詞の種類に関わらず、いずれも字面の意味「出村莊」で理解しがちである。実際、「出る」と組み合わせた名詞が「を格」をとると、その名詞は動作の「離れる場所」を表し、「に／へ格」の場合は、その名詞は「目的、到着の場所」を表すことである。また、「まで格」は「移動の範囲」を示すことになる。しかし中国語では、そうした違いが格助詞によってではなく、異なった動詞（離開、到、從、走到）を用いて表現したりすることになる。このように、動詞と格の名詞との組み合わせの間に、異なるタイプの関係性を示すことによって日本語の格システムの深い理解につながる。そして、格システムの理解を深めることは連語の体系的な学習にも役立つと考えられる。

4.3 多義語から生じた問題点

多義語とは「多くの意味を持っている語」のことである²。Lakoff (1987) は、認知言語学の観点から、多義語を、プロトタイプの意義を中心に様々な動機づけを持って周辺の意義に拡張する「放射状カテゴリー」をなすと特徴づけた。つまり、メタファーなどのメカニズムによって一つの基本義に複数の関連のある語義が絡み合って多義語としての意味が成り立つのだろう。そのため、多様な意味や用法を持つ多義語は学習者にとって習得が難しい項目になると思われる。ここでは、日本語と中国語にともに

存在している「打つ・打 (dǎ)」という多義動詞を例として分析してみる。

『明鏡国語辞典』によれば、日本語の「打つ」は18の意味項目を有しているが、すべては日常でよく使用されるとは限らないと考える。そこで日本国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)で日本語の「打つ」を検索したところ、野球関係の「ボールを打つ」のような例が非常に目立つ。また、「頭を打つ」「釘を打つ」「波が岸を打つ」「手を打つ」など「たたく」、「ぶつかる」、「衝突する」という意味の用例もよく見かけた。いずれも一方の物体が他方に衝撃力を加える「打撃」とか、物体同士の「衝突」など物理的なイメージを与える。また、比喩的に、「感動させる」ことを「心を打つ」「胸を打つ」という表現もあるが、心に衝撃を与える意味では、やはり物理的に捉えられる。

一方、中国語の「打」の意味は『中日辞典』で全部で26種にも分類している。日本語と同じく「たたく」を意味する「打鼓(太鼓を打つ)」や「打人(人をたたく)」の用例もあるが、多くの動詞の代役として盛んに使われて遊技やスポーツ、動作や行為を表せることは日本語とは区別されている。例えば、「打+目的語」の目的語のところに、日常用品を代入すると、「打雨傘(傘をさす)」「打灯籠(提灯を掲げる)」「打毛衣(セーターを編む)」「打車(タクシーを拾う)」「打麻将(マーじゃんをする)」となる。これらの例では、本来の動詞は「打(たたく)」ではなく、「さす=撐」、「掲げる=提」、「編む=織」、「拾う=叫」「する=遊ぶ」といった動詞の代役を果たしている。また、目的語は動物や植物である場合、「打魚(魚を捕る)」「打鳥(鳥を捕まえる)」「打雞蛋(卵を割る)」「打草(草を刈る)」「打粮食(穀物を収穫する)」となり、自然環境関連では「打水(水を汲む)」「打火(火を起こす)」「打气(空気を入れる)」「打

2 『大辞林(デジタル版)』の記述による。

井(井戸を掘る)」「打雷(雷がなる)」などの表現が見られる。このように、中国語の「打」は日本語より基本義から意味拡張が広範に起こり、「打」の字で多くの動作や行為を表せるため、非常に便利な言葉と言える。ただし、この点は逆に中国人日本語学習者の連語学習に支障を及ぼす恐れがある。日本語では「さす、掲げる、編む……」など本来の動詞を使うべきところに、母語の影響で「打つ」を誤用してしまう可能性もあるからだと考えられる。

以上、日本語の「打つ」と中国語の「打(dǎ)」を考察し、両者は言語形式が類似しているため、語彙知識としては十分だと思われがちだが、実際の使用場面においては、多義語としてそれぞれ意味拡張が行われ、名詞との結合関係の面では大きな差が見られる。よって、多義語は学習者の連語学習に一層困難をもたらしていると考えられる。

5. まとめ

従来、語を個別的・孤立的に捉える傾向があり、教師や学習者の関心が連語にではなく、教科書に現れた個々の新出単語に向けられると指摘されている(三好 2007)。中国の日本語教育現場でも同じ傾向が見られる。これを受けて、本稿ではアンケート調査を通して、中国人日本語学習者によく見られる連語習得上の問題点及びその指導法を考察し、中国人日本語学習者の語彙や連語の習得に寄与すると考える。

具体的には、日本語の言語構造や母語中国語の影響などを考慮に入れて「同形同義語」「格助詞」「多義語」という三つの面から考察した。「同形同義語」について分析した結果、両言語における同形同義語は形や意味が同じだとしても、共起や用法ではずれがあることもあって、学習を指導する際、漢語に対応する和語についても、明示的な学習が必要だと考える。「格助詞」について考察したところ、「格」システム

を備えない中国人日本語学習者に、日本語の格システムを体系的に提示し、「連語」という概念をもあわせて導入することが学習を促進させると考える。また、多義語から生じた問題点について、言語形式が類似している日本語の「打つ」と中国語の「打(dǎ)」を考察することによってある程度明らかにした。実際には、「打つ」と「打(dǎ)」は多義語としてそれぞれ意味拡張が行われ、名詞との結合関係の面では大きな差が見られ、多義語は学習者の連語学習に一層困難をもたらしていると考えられる。

以上より、中国人日本語学習者に対する語彙指導には、単語レベルの指導ではなく、共起語に注目させる連語指導を取り入れる必要があり、また日本語の言語構造や母語としての中国語の影響を無視してはいけないと考える。したがって、このような学習指導法は学習者の語彙や連語習得の促進に重要な意義があると考えられる。

(後記：この論文は、「杭州市哲学社会科学规划常规性课题(Z16JC047)」「浙江省社会科学界联合会研究课题(2015N078)」「浙江省教育厅科研项目(Y201534473)」による研究成果の一部である。)

参考文献：

- 市川保子(2001)「日本語の誤用研究」『日本語教育 通信』NO.40、東京：国際交流基金
- 伊藤醇(他)編(2002)『中日辞典』第2版 小学館・北京商務印書館
- 大曾美恵子(2005)「コーパスによるコロケーションの特定－日本語学習辞書の充実を目指して－」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房、11-23.
- 岡部幸枝・松本茂 編(2010)『高等学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』明治図書

I 論文・報告等

- 門田修平・池村大一郎（2006）『英語語彙指導
ハンドブック』大修館書店
- 北原保雄編（2002）『明鏡国語辞典』大修館書
店
- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』1
月号 明治書院
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書
店
- 小森和子（2013）「日本語学習者の語彙知識の
習得に及ぼす第一言語の影響－中国語を第
一言語とする日本語学習者の和語習得を通
して」『明治大学国際日本学研究』第6巻第1
号、91-115.
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大藏
省印刷局
- 松本順子・堀場裕紀江（2007）「日本語学習者
の語彙知識の広さと深さ－中国語母語話者と
日本語母語話者の比較－」『第二言語として
の日本語の習得研究』10号、第二言語習得研
究会、10-27.
- 宮地裕（1985）「慣用句の周辺－連語・ことわ
ぎ・複合語－」『日本語学』1月号 明治書院
- 三好裕子（2007）「連語による語彙指導の有効
性の検討」『日本語教育』134号、日本語教
育学会、80-89.
- Benson, M. (1985) . *Collocations and idioms*. In R.
Ilson (ed.) , *Dictionaries, lexicography, language
learning* (pp. 61-68) . Oxford: Pergamon Press.
- Firth, J.R. (1957) . *Paper in linguistics 1934-1951*.
London: Oxford University Press.
- Lakoff, G (1987) *Women, Fire, and Dangerous
Things*. Chicago University Press.
- Morgam Lewis (2000) . *Teaching Collocation:
Further Developments in the Lexical Approach*.
England: Language Teaching Publications.
- Nation, I.S.P. (2001) . *Learning Vocabulary
in Another Language*. Cambridge: Cambridge
University Press. (吉田晴世・三根浩 (訳)
- (2005) 『英語のボキャブラリー・ラーニン
グ』 松柏社)

<付録>

連語習得に関するアンケート調査

このたび、大学生の語彙習得の実態を把握するため、皆様にアンケート調査をお願いすることになりました。当てはまるものに○を付けてください。「その他」を選んだ場合、中国語で詳しく書いてください。また、調査の結果に関しては、論文内で分析し、研究資料として活用していきたいと思っております。それ以外に利用することは一切ございません。以上の趣旨をご理解いただき、何卒このアンケート調査にご協力くださいますよう、よろしく申し上げます。

.....

以下の欄にご記入ください。

性別：「男・女」

学年：「1・2・3・4」

第一部. 当てはまるものに○をつけなさい。

問題1. 新しい課に入る前に単語の予習をしますか。

1. いつもする 2. 時々する
3. あまりしない 4. 全然しない

問題2. 問題1で①～②を選んだ人は、予習にどのぐらいの時間をかけますか。

1. 15～30分 2. 30～45分
3. 45～60分 4. 60分以上

問題3. 授業の後、単語の復習をしますか。

1. いつもする 2. 時々する
3. あまりしない 4. 全然しない

問題4. 問題3で①～②を選んだ人は、復習にどのぐらいの時間をかけますか。

1. 15～30分 2. 30～45分
3. 45～60分 4. 60分以上

問題5. 単語の予習・復習に何をしますか。それぞれ当てはまるものの後ろの括弧に○をつけてください（複数の選択も可）。「その他」を選んだ場合、できるだけ詳しく書いてください。

A: 予習 B: 復習

1. 単語を繰り返して朗読する (A) (B)
2. 単語を繰り返して書く (A) (B)
3. 辞書で単語を調べる (A) (B)
4. 単語の意味を覚える (A) (B)
5. 文と一緒に単語を覚える (A) (B)
6. 会話文・読解文の中で単語を覚える (A) (B)
7. そのほか

第二部. 次の文の下線部に当てはまる選択肢に○を付けてください。それから、その中国語の意味も書いてみてください。

1. 結果がどうなったか、気が気でない様子だ。
 1. 習ったことがある 2. 習ったことがない
 3. 知っている 4. 知らない
2. この町は夜遅くまで足があるので、便利でいい。
 1. 習ったことがある 2. 習ったことがない
 3. 知っている 4. 知らない
3. 外の騒がしい音で目が覚めた。
 1. 習ったことがある 2. 習ったことがない
 3. 知っている 4. 知らない
4. 実際に確かめられないのなら、机上の空論に過ぎない。
 1. 習ったことがある 2. 習ったことがない
 3. 知っている 4. 知らない
5. ここまで株価が下がると、逆に食指が動く。
 1. 習ったことがある 2. 習ったことがない
 3. 知っている 4. 知らない